〔諸家奥女中袖鏡〕身持たしなみやうの事

一紅粉は白粉と共に粧ふものなり、凶時の時、おしろいを粧ふ事ありとも、紅粉は付ぬ物なり、

〔后宮名目〕入輿の眉

粉體用薄紅脂

〔女用訓蒙圖彙三〕髪の事

點頰

ほうさきに紅をつくるは、櫻の花ぶさにたとへたり、花の玄ろき底に、ほの〴〵と赤色のあるにもあらず、なきにもあらぬやうにすべきなり、然るを紅つけたるとめにたつは、無下に心おとりせらるゝ也、

〔嬉遊笑覽一下容儀〕近く享保頃までも、頰紅とて、紅と白粉と交て頰にぬれり、白粉ばかり粧ふは、遊女のことなりとかや、

〔守武千句〕霜何第八

いとゞだに顔のあかかる人なれや
ほゝさきのみかべにさへもうし

〔用捨箱中〕椿頰燕脂

今の少女、何にもあれ、花のちりたるを取て、頰あるひは額へ唾にて押、戯れをする事あり、是は頰紅をつけし頃、そのまなびをなしたるが、頰紅廢れて後も、童あそびに殘りしにて、茄子の皮を口に含て、鐵漿をつけたるまなびをする類なり、

著唇

〔嬉遊笑覽一下容儀〕近頃は、紅を濃くして唇を青く光らせなどするは何事ぞ、青き唇はなきものを、本色を失なへり、それゆゑ時勢粧を畫く者、女の唇を草の汁にて塗り、濃彩には綠青して彩りぬ、周の時に有りしといふ、黃眉墨粧あやしむべからず、